

---

# 闇夜の陰陽師 ~ 叶 ~

妖花?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇夜の陰陽師〜叶〜

### 【Nコード】

N7587Z

### 【作者名】

妖花？

### 【あらすじ】

都から遠く離れた森の中に小さな村があった。  
そこには、ひび鍛錬を行う陰陽師の少女がいた。  
ある日、都にある陰陽師の卵たちが集う陰陽寮に招待され・・・。

# 第1章 第一話 始まりの予感

## 始まりの予感

都から遠く離れた、森の奥にある小さな村。

そこは、古くから術者が住んでいる村。

陰陽師だけでなく妖使いや呪術師もこの村に古い歴史を残していた。

そこで生まれた「叶」は、今日も夜遅く森の中を走り回っていた。

「おりゃああ！ 妖どもかかってらっしやい！！」

少女の大きな声が静まり返った森に響いていった。

遠くの木陰から巨大な百足が姿を現した。

大きさは、叶の体がちっぽけに見えるほどだった。

血なまぐさいにおいと寒さがあたりを覆った。

「縛縛縛、束縛！」

漆黒の髪を揺らしながら、叶は札を手に取り印を結んだ。

百足は何かにつまられたように、身をよじり奇妙な声を発した。

ぎりぎりと言をたて、拘束から逃れようとする。

叶はさらに違う印を結んでいく。

「オンアビラカソワカ…破！」

ビキッ

百足の堅い甲羅にひびが次々入っていく。

ひびの隙間から光が漏れ始める。

ギャウアウアアアウウ…

断末魔が森を騒がしていく。

「あと少し…」

冷や汗が頬を伝っていく。

印を結んでいる手に力を集中させた。

バキイイン……

ついに百足はバラバラに割れた。破片が地面にたたきつけられ、粉々になり消えていく。

「ふう……」

緊張の糸をほどく。森は静けさを取り戻していく。

「おつかれ、叶」

何もない空間から一匹の狐の式神が姿を現した。

足は幽霊のように薄くなっている。

首には水晶を下げており、狐の周りには鬼火がふわふわと浮いている。

「これでしばらく、森は静かになるわね。凱」

凱と呼ばれた式神は叶の肩に手をついた。

「それより早く帰ろうぜ叶。眠くて仕方ねえ」

凱はくわあつと大きな欠伸をした。

「あなた、それでも式神？ 逆に目が覚めるもんじゃないかしら」

叶は凱を細い目で見つめた。

当の凱は叶の肩でだらんとしている。

「まったく……」

溜息をつく叶。

一人と一匹は村への帰路につく。

噂

噂

隠路村おんろ またの名は「術者の隠れ里」。

この里の存在はあまり知られていない。術者以外は…。術者にとって、有名な場所らしい。さまざまな術者が集う村。伝説の陰陽師が住んでいる、呪いの呪具がそろっているなど噂はそれぞれ。

村に着いた叶と凱。村はもう寝静まっていた。

月の明かりが淡く、村を照らしている。

ふと、叶は物音を聞いた。紙が刷れる音。

その音の正体を知っている叶は、溜息をついた。

音のした方に足を向ける。

術者にしかわからない、霊力の気配を感じた。

少し進むとその霊力の持ち主を見つけた。

少年がぺたりと地面に座り込んでいた。少年の周りには破れた紙切

れが散らばっていた。

「尖せん、何してるの？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7587z/>

---

闇夜の陰陽師 ~ 叶 ~

2011年12月27日23時51分発行